

# はじめに

初めまして、タクヤです。

僕のプロフィールレポートに興味を持っていただきありがとうございます！

このレポートでは僕（タクヤ）はどういう人生を送ってきたのかというストーリーを書き記しました。

タクヤはこんな人生を送ってきたんだよということを事前に知っておいていただくことで、ブログを読んだりするときにも親近感を持って読みやすくなると思います。

そして、僕は今、金銭的に自由になるためにビジネスと投資の勉強、実践をしているのですが、このレポートを読むことで、なぜ、僕がビジネスと投資に興味を持ったのかということも分かると思います。

あと、大前提として、僕はもともと人生に何の生きがいもなく惰性で生きているような、ダメ人間でした。

ですが、現在はビジネスと投資の世界に足を踏み入れることで、日々成長できる楽しい人生を送っております。

その辺のいきさつもこのレポートを読み終わるころには少しずつ、  
わかってくるので、ぜひ楽しんで読んでいただければと思います。

それでは、ここから、レポートの始まりです。

# 目次

はじめに

第1章「運動も勉強もダメダメだった小学生時代」

第2章「典型的な陰キャだった中学生時代」

第3章「常にぼっちだった高校生時代」

第4章「相変わらず孤独な大学生時代」

第5章「ビジネスと投資との出会いで人生が楽しくなる」

最終章「あとがき」

## 第1章 運動も勉強もダメダメだった小学生時代

まずは、僕が小学生時代のことから話していこうと思う。

小学生時代の僕は運動も勉強もできる優秀な子供ではなかった。

それは小学1年～6年まで同様だった。

小学生時代の僕を一言で表すとしたら「運動も勉強も全然できなかった超平凡な子供」というのがぴったりの表現だと思う。

で、僕は、運動も勉強もできる子を見ると「いいな—あいつは才能があって」という嫉妬のような気持ちを心の中で抱いていた。

ぶっちゃけ、「いいよな—あいつは運動も勉強もできて・・・」と嫉妬したところで、自分の成長度は0だ。

ちなみに、今の自分からしたら、運動でも勉強でもできるようになるためには、どうすればできるようになるのか？という知識を仕入れて、練習を繰り返せばできるようになるということは簡単にわかる。

だが、当時、小学生で無知だった僕からしたらどうすれば、運動と勉強ができるようになるのかが、本当に分からなかったのだ。

なので、運動と勉強ができないことに関しては、小学生時代での大きなコンプレックスになった。

特に運動会の徒競走とかマジで嫌いだった。

なぜなら、運動神経が本当にないので、毎年のように、6人中5位か6位という悲しい結果になってしまうからだ。

それが本当に苦痛で仕方がなかった。

そして、小学1年の時の話になるが、僕は小学1年生の下校途中に交通事故にあった。

学校帰り、道路を横断するときに走ってきた車に思いっきり弾き飛ばされたのだ。

僕は現在20代だが10年以上前のあの日のことは今でもよく覚えている。

あの日は、学校から僕と友達2人（計3人）で下校していた。

で、友達2人が道路を横断して「おーいタク（僕の呼び名）も早く渡って来いよ」と言われて、道路を横断して

るときに車にはねられたという状況だった。

おそらく、その時の自分は、早く家に帰ってゲームをしたいという気持ちでいっぱいだったので、しっかり安全確認をせずに、道路を横断した可能性が高い。

車に跳ねられたときには血だらけだったが、何とか意識はあって、気づいたら病院に運ばれていた。

入院中は、一緒に下校していた友達や、両親、親戚などたくさんの方がお見舞いに来てくれた。

入院してすぐは立って歩くことができないで車椅子で移動するような状況だったので「僕はこのまま一生歩くことができないのかな？」という不安を持ったこともあった。

だが、入院1週間、2週間と時間がたつにつれ徐々に歩けるようになってきた。

普段は歩くのなんて当たり前でありがたいなんて1ミリも思わなかったけど、実際に車椅子生活をやってみて、ただ普通に歩けるのがなんて幸せなんだと思えるようになった。

結局、僕は2、3週間程度、入院をして無事退院することができた。

この時は本当に心の底から「生きていて良かったー！」と思った。

そして、僕は小学2年生頃からスイミングスクールに通うことになった。

きっかけは、僕があまりにも運動嫌いだったので、母が「お前は何でもいいから運動をやれ」と言ってきたのがきっかけだった。

なので、自分から進んでスイミングをしたいと思ったというより、運動をさせるために母親からスイミングスクールに通わされたというのが大きい。

運動嫌いの僕からしたら水泳をやるとか絶対に嫌だという感じだったので、週1回のスイミングスクールの日が来るたびに憂鬱になっていた。

だけど、何度も何度もスイミングスクールに通って、少しずつ泳げるようになってきたことで、ちょっとだけ、楽しくなってきた。

スイミングを始めたてのときは、泳ぐのとかマジで無理だーと思っていたが、やはり人間の「慣れ」というのはすごい。

何度も何度も泳ぐ練習をしていると、慣れてきてある程度は泳げるのが当たり前という感覚になってくるのだ。

結局、スイミングの習い事は小学4年生頃にやめることになった。

だが、ある程度は泳げるようになって家族とか友達と市民プールで楽しめるようになったので、嫌々でもやっていて良かったなど、今になって思う。

そして、スイミングスクールをやめて、「よしっ、これで運動をしないでゲーム三昧だ！」と喜んでいたら、母親から今度は「バスケでもやれば？」と言われるようになった。

ちょうど、これは小学4年生頃の話である。

母はとにかく、運動音痴な僕に何かしらの運動をやらせたかったのだ。

なぜ、バスケと思うかもしれないので、一応言っておくが、友達がちょうどその時、バスケを習っていて、僕の母親とその友達の母親はママ友みたいな感じで、仲が非常に良かった。

で、僕の母はその友達の母から「うちの子供はバスケを習ってるのよ」みたいな感じで話を聞いたのだろう。

「〇〇さん家の子はバスケやってるらしいよ。タクヤもやってみたらどう？」と母に言われることで、僕はスイミングスクールの時と同じように、嫌々バスケをやることになった。

地元のミニバスチームに入ることになった。

ちなみに、ミニバスというのはミニバスケットボールの略称で、小学生6年くらいまでの子どもたちがやるバスケのことである。

もちろん、運動音痴の僕にとってバスケをやり初めてすぐは、アメトークの運動神経悪い芸人みたいな感じだった。

運動神経悪い芸人のように明らかに下手くそというより、ナチュラルに下手くそなのである。

だが、そんな僕でも、スイミングの時と同じように、練習をすればするほどバスケはどんどん上手になっていった。

そして、僕がミニバスをやっていた時に今でもよく覚えているのが、ミニバスのコーチである。

正直、僕はこのミニバスのコーチのもとでバスケをやるのが、本当に嫌だった。

なぜなら、とにかく超スパルタなコーチで指導がめちゃくちゃ厳しかったからである。

練習中も「おい、タクヤしっかり走れ！」と怒号が飛んでくるし、このコーチはキチガイかよと思うこともしばしばあった。

だけど、ミニバスで1個年上の子は僕と仲良くしてくれて、ふざけたことをして笑わしてくれたりもした。

なので、バスケのコーチからスパルタ指導をされるのは苦痛だったけど、1個年上の先輩や同年代の友達とワイワイできたのはけっこう楽しかった。

で、結局、バスケは小学4年から初めて小学6年の夏頃にやめた。

バスケをやったのはたった2年間だったが、もともと運動をしなかった僕からしたら、運動をするのが当たり前という感覚になれたのがすごい大きかった。

あと、勉強面に関しては超劣等生というわけではなかったが、平均よりは明らかに成績は悪かった。

イメージでいうと、ほとんどの教科が30点~70点くらいで、極まれに奇跡的に社会の教科で90点が取れるような感じだった。

とにかく、勉強も運動も全然できなかったのが僕の小学生時代である。

## 第2章 典型的な陰キャだった中学生時代

あなたは陰キャという言葉をご存じだろうか？

陰キャというのは、陰気な性格の人のことだ。

例えば、教室の端っこだんよりと暗いオーラを出していたり、休み時間にいつも1人で寂しくしている人のことを陰キャという。

で、中学生時代の僕といえば、まさに陰キャそのものだった。

休み時間になっても友達といえる友達がいなかったので、授業中に出た課題プリントをやっていたり、読書をしたりして寂しさをごまかしていた。

周りのクラスメイトは昼休みになると校庭でサッカーをしたり、みんなとワイワイして本当に楽しそうだった。

こんな感じで陰キャの性格で友達がいなくて、寂しく毎日が過ぎていくというのが、中学での僕の生き方そのものだった。

中学といえば、多くの人が何かしらの部活動に入るものである。

部活動は大きく分けると2つある。

運動部と文化部である。

僕は、小学生時代の章でお話ししたように運動をするのが、大の嫌いである。

だから、当然のように、運動部ではなく文化部に入ること  
をあらかじめ自分の心の中で決めていた。

で、自分は何の部活に入ったのかというと科学部という部活に入  
った。

理由は、もちろん、運動をしなくて済むのと何となく楽な  
イメージを持ったからだ。

少なくとも、当時、運動嫌いだった僕からすれば屋外で  
汗を流して運動をせずに済むというのは、まさに  
天国だと思った。

科学部では、カルメ焼きを作ったり、ペットボトルロケット  
を作って校庭で飛ばしたりした。

確かに、科学部での活動は最初のうちは、知らないことば  
かりで楽しかったけど、実験内容は決して多いわけではない。

だから、毎回毎回、同じような実験ばかりをしているうちに、だんだんと飽きてきてしまった。

なので、科学部に入部したのが中1のときだとしたら、中2になるくらいには、惰性で部活動に参加するような感じになった。

まあ、部活動はそんな感じでなんとなく、惰性で3年間やり続けた。

そして、僕が中学の時に本当に嫌で嫌でたまらなかったイベントの1つが、マラソン大会である。

ただちょっと、運動をするだけでも嫌なのに、3キロとか4キロとか平気で走らされるマラソン大会は僕にとって超地獄だった。

マラソン大会の時期が近づいてくると、体育の授業では校庭のグラウンドをひたすら走るというメニューが増えてくる。

いわば、マラソン大会のウォーミングアップ的なものである。

僕は体育のマラソン練習の時は、腹が痛いとか頭が痛いと言って仮病を使ってよく保健室で休んでいた。

で、ついにマラソン大会本番の日がやってきてしまった。

僕の本音としては仮病を使ってマラソンなんて休みたいと思っていたが、マラソン大会の日は中学校が運動一色モードになっていて、「マラソン大会やりたくありません・・・」と言出しにくい環境になっていた。

なので、僕は覚悟をしてマラソン大会に参加した。

正直、順位が1位とかビリとかそんなもんでもいいから、早く終わらせてくれと心の中で思っていた。

そして、「よーい、スタート！」という合図とともにマラソン大会が始まった。

最初のうちは僕の後ろに走っていた人もたくさんいたが、途中から徐々に、僕の後ろに走っている人数が減ってきた。

僕の横をどんどん同級生たちが追い越していく。

それで、何とか、ゴールまで完走することができたが、結果は案の定、ビリから2番目だった。

僕の中学は男子だけで1学年100人近くいた学校なので、99位とかそんな感じだった。

正直、最後のほうで、時間差でゴールする瞬間は他学年とか女子に堂々と見られるので、かなり恥ずかしかった。

だが、何よりマラソン大会が終わって本当に良かったとホッと一息つくことができた。

こんな感じで、小学生時代と同様に中学生時代も運動も勉強もダメダメな日々を送っていた。

運動も勉強もできずにダメダメだった僕だが、唯一、楽しかったことがある。

それは、何かというと、ゲーセンでメダルゲームを極めつくしたことである。

そう、僕は中学生の時、メダルゲームにめちゃくちゃハマっていた。

ゲームセンターのメダルコーナーにあるメダルゲームである。

某ショッピングセンターのゲームセンターに父としょっちゅう通っていて、ゲーセンの店員全員が僕と父の顔と名前が一致するくらい通いつめいていた。

時には、土日の、午前10時頃にゲーセンに行って夜中の10時近くまで、メダルゲームをやった日もあった。

ショッピングセンターの中に入っているゲーセンなので昼飯はフードコートでマクドナルドのハンバーガーを食べたりした。

ゲーセンでメダルゲームをやっていると、同じようにメダルゲームにはまっている常連の人たちと「今日はメダルの調子どうですか？」とよく会話していた。

それで、メダルゲームでジャックポット（大当たり）を出すと手元のメダルをどんどん増やしていくことができるのだが、それぞれのゲーム機にコツみたいなものがある、いったん、そのゲームのコツをつかむとみるみるメダルが増えるので本当に楽しかった。

そんな感じで、中学校内での生活はそれほど楽しくなかったが、ゲーセンでメダルゲームをやっているときはすごい楽しかった。

僕の中学生時代はこんな感じで、学校内では友達もいないで、陰キャだったが、ゲーセンでメダルゲームをやっているときは陽キャなような感じで楽しんでいた。

## 第3章 常にぼっちだった高校生時代

僕は中3の時に、あまりにも成績が悪すぎて担任の先生からは「タクヤ君はこの成績じゃ行ける高校がほとんどないよ」と言われた。

この時、僕は「このままじゃヤバイぞ・・・」と思うのではなく「まあ、なんとかなるっしょ！」とお気楽な気持ちで考えていた。

結局、その後、いろいろなことがあったが、なんとかギリギリで高校に入学することができた。

担任の先生も「どこか入れる高校はないか？」と親身になって探してくれたのが幸いした。

もちろん、勉強の成績が良くなかったので、世間的に見れば僕が入学した高校は、超エリート学校というわけではない。

中の中という感じだ。

ちなみに、僕が入学した高校は商業高校だったので、簿記や原価計算、情報処理などの授業があった。

国語や数学、理科という典型的な授業に加えて、

上記のような商業関連の授業もやるという感じだ。

だから、中間テストとか期末テストでは、国語や数学、英語などの一般科目が5教科。

簿記とか、電卓の授業など商業系科目が7教科くらいあって、トータル12教科くらいを、3日程度で一気にやり通すので、これが結構大変だった。

で、高校生活がスタートして僕はまず、誰か仲良くしてくれる友達を作るぞーと思ってワクワクした気持ちでいっぱいだった。

クラスの席で前後の人に積極的に話しかけてみたり、自分なりにいろいろ頑張ってみた。

確かに最初のうちは、会話が弾むこともあって楽しかったが、途中からだんだん話が续かなくなってきた、気まずい空気になることが増えてきた。

そして、僕はぼっちになった。

ぼっちというのは友達がなくていつも1人ぼっちでいる人のことである。

中学生時代の章に、僕は陰キャだったということを話したが、高校生になっても、完全に陰キャ精神は抜け切れていなかったようだ。

だから、相手から話しかけられても挙動不審になってしまったりして、「なんかコイツ変な奴だな」と思われて、自然と人が離れていった。

もちろん、全員が全員、僕のことを避けていたわけではなくて、僕が昼休みに机にふせて寝たふりをしてしていると、「タクヤ君、一緒にバスケやらない？」と優しくしてくれた子もいた。

僕は涙を流しながら喜んでバスケをした。

小学生時代にバスケをやっていたおかげで、体育の授業でバスケのときだけは、僕は活躍だった。

僕はバスケが上手かったので、バスケの授業では、「タクヤ君と同じチームになりたい！」と言ってくれた子もたくさんいた。

だから、バスケの授業のときは本当に楽しかった。

しかし、楽しいのはバスケの授業の時だけで、それ以外の時間は基本的に、友達がないので、常にぼっちだった。

パソコンの授業で教室移動があるときも、ノートと筆記用具を持ちながら1人で、トボトボ移動するような感じだった。

で、僕の高校は男女比率が3：7くらいだった。

つまり、1学年で男子が100人いたら女子は300人いるようなそんな学校だった。

だから、校内では彼氏と彼女でイチャイチャしているような人も結構いた。

そりゃ、男子が100人、女子が300人いれば男は彼女を作りやすい環境というのは間違いない。

僕は、高校生当時、「彼女がほしくてたまらん」と思っていたわけじゃなかったが、やはり校内で男女がイチャイチャしているのを見るのは、あまりいい気分ではなかった。

「男と女でイチャイチャするのは外でやれや！」としょっちゅう思っていた。

だが、僕は中学生時代に培った陰キャ精神を高校生でも引き継いで、暗いオーラを出してたんだから、そりゃ、モテるはずがない。

今の自分が客観的に、当時の高校生時代を振り返ってみれば、あれじゃ彼女できないわ（笑）とあらためて納得できる。

そんなこんなで、友達なし、彼女なしの高校生活だったが、無事卒業することができた。

## 第4章 相変わらず孤独な大学生時代

そして、僕は大学生になる。

僕が入った大学は、これまた商業系の大学である。

商業系の大学で商学部に入った。

「なんか、普通の大学より商売とかそういうのを教えてくれる大学がいいんじゃないか？」的な軽いノリで大学に入学した。

ちなみに、僕が入学した大学ではマーケティング論とか、企業経営論とか経営学とかファイナンス論みたいな授業が多かった。

大学に入って、まずやることは履修登録と言って自分が受けたい授業科目を登録するという作業である。

最初のうちは、「はぁ、履修登録とかどうやればいいんだよ！！」と混乱していた。

だが、大学の事務の人に「履修登録ってどうやればいいんですか？」と聞いたりして試行錯誤して何とか履修登録することができた。

そして、お楽しみの大学の授業が始まった。

「しっかり授業についていけるかな？」とかいろいろな心配があったが、それ以上に大学の授業ではどんなことを教えてもらえるんだろう！というワクワク感が大きかった。

で、1回目の授業はオリエンテーションみたいな感じで、先生から「この授業ではこんなことをします」という話が聞かされる。

ここまではいいのだが、第2回目から本格的に授業が始まって僕はいろいろとガッカリすることになる。

まず、大学教授の教え方が超つまらないのである。

中には、ロボットのように、教科書をただ棒読みしているような、先生もいた。

「えーこの経営理論はですねー・・・」みたいな感じでひたすら、教科書を棒読みして、「本当に学生に勉強してほしい気持ちがあるのか？」とってしまうような先生も何人かいた。

なので、僕は「なんか大学の授業ってイメージと全然違う・・・」と幻滅するようになっていった。

だけど、大学では授業のテストで合格して単位をとっていかないと、卒業できない。

だから、「大学の授業はマジでつまらねえな」と内心思いながら、我慢して授業を受けていた。

しかも、僕は相変わらず友達ができなくて家と大学を往復するような孤独な毎日を送っていた。

大学には図書館があって、図書館に1人でひきこもって、本を読んだりレポート課題を仕上げたり、スマホでネットサーフィンをするのが、日々のルーティーンだった。

正直に言うと、中学、高校、大学と友達が全然いない時期が長く続くと、1人でいることが意外と苦ではなくなってくる。

普通の人からすれば「ラインの連絡先に友達が入っていないと不安になる」とか「ぼっちでいるのが怖い・・・」という感情が出てくると思う。

だが、中学、高校、大学と友達がいない時期が長く続くと感覚がマヒをしてきたのかわからないが「別に1人ぼっちでもなんとも思わなくなったな」と感じる機会が増えてきた。

高校生くらいの頃までは本当に1人ぼっちでいることが苦痛だった。

しかし、大学生くらいになると、孤独でいようが、だれか人と一緒にいようが、別にどうでもいいやという気持ちになってきた。

で、不思議なことだが、僕が「別に1人ぼっちでもいいや、人から嫌われてもいいや」と吹っ切れて行動するようになってから、なぜか人から信頼されたり、友達ができたりするようになった。

おそらく、友達がほしいという態度が見え見えだった自分から、自然体な自分になったことで、「コイツ（タクヤ）といると面白いじゃん！」と思う人が増えたからだと思う。

つまり、今までカッコつけて着飾って友達がゼロだった僕が、素の自分を出していくことで、多くの人間から信頼され頼られるような人間になることができたのだ。

この経験から、僕は無駄にカッコつけずに、自分の等身大で人と接することの大切さを学ぶことができた。

## 第5章 ビジネスと投資との出会いで人生が楽しくなる

そして、ある日、僕は大学の図書館にこもって、いつもどおりスマホでネットサーフィンをしていた。

僕はいつも「金持ちになりたい!」「会社のために自分の自由時間を拘束されるのは絶対に嫌だ!」と思っていた。

だから、グーグルの検索窓に「お金持ちになるためには」とか「経済的自由を手に入れるためには」みたいなキーワードを打ち込んでいろいろ調べまくるのが、日課だった。

それで、いろんなブログやユーチューブ動画、書籍などを読み漁っているうちに、多くの人が同じようなことを言っていることに気付いた。

それは何かというと、「金持ちになるには自分でビジネスをするか投資家になるしかない」ということだった。

僕はこのとき思った。

「自分がビジネスとか投資をやるなんて絶対に無理だろ」と。

「ビジネスをしろってことは松下幸之助とかスティーブジョブズみたいになれってことだよな？それはどう考えても無理でしょ。」と心の底から思った。

僕のイメージではビジネスというのは、成功できれば、いいけど、失敗したら多額の借金を負って、悲惨な人生になるという考えで頭の中が埋め尽くされていた。

だから、僕は、「はあー、金持ちになるためにはスティーブジョブズみたいに 아이폰を開発しなくちゃダメなのか」とショックを受けて、一時的に金持ちになるのを諦めかけた。

だけど、会社で一生骨を埋めるというのは、僕の頭の中には1ミリもなかったし、何が何でも金持ちになってやる！という気持ちが強かったのでやはり、金持ちになる夢を諦めきれなかった。

そして、再び、情報収集を再開させた。

僕の頭の片隅には、「金持ちになるためには、ビジネスをやるか投資をやるしかない」という言葉が強烈にしみついていました。

なので、ビジネスもいいけど、投資っていうのもどういふものか調べてみるか！と思ったので、「投資で稼ぐ方法」みたいな感じで投資についてのリサーチもやった。

「投資で稼ぐには」と検索窓に打ち込んで調べてみると、投資で稼ぐには、株式投資やFX、不動産投資、投資信託などいくつか種類があることを知った。

で、僕はいろいろと調べているうちにすぐに、不動産投資は今のところないなと思って選択肢から消した。

なぜなら、不動産投資で本当の意味で儲けるためには、手持ち資金が何千万円とか何億円という金額が必要だと知ったからだ。

投資信託も堅実な投資になるが、金持ちになるには時間がかかりすぎると言っている人が多かったので、投資信託も選択肢から消した。

で、残ったのが株式投資とFX（為替取引）だがどうやら、株式投資とFXは不動産投資のように莫大な金額が必要なわけでもないようだ。

もちろん、元手は多ければ多いほどいいけれど、株とFXは元手が数十万とか数百万でも、上手な人がやれば何とか資金を増やしていけるということが分かって僕は希望が湧いた。

ただし、株式投資とFXは上手になれば、元手数十万円からでも資金を増やしていけるが、それでも元手額が数十万円程度だけだと、投資1本で食っていくのは結構大変だということが分かった。

なので、とりあえず、僕の頭の中で、株とFXの投資自体は、必ずやっていくという感じで軸を固めた。

投資ともう1つ、ビジネスについても再リサーチしてみた。

そうすると、ネットビジネスという何とも怪しい響きを感じるビジネスと僕は出会うことができた。

ネットビジネスというのは、ブログの広告収入だったり、アフィリエイト（自分のブログなどで商品が売れると報酬が出るビジネス）などをネット上で行うことでお金が稼げるものである。

そして、リアルビジネスと違って、1000万円といった資本金は必要なくて、1万円~多くても10万円程度あれば、十分にネットビジネスをやっていけるというではないか。

さらに、うまくいけば、収入を青天井で増やしていくことも可能になるらしい。

リサーチをしていくにつれ、「ネットビジネスならこんな僕でもできるんじゃないか？」と希望に満ち溢れた。

ネットビジネスを勉強する前の僕はこう思っていた。

「ネットビジネスってあれでしょ？なんか怪しい壺を売りつけて儲けるやつ。」

そう、僕はネットビジネスをネットワークビジネスのことだと勘違いしていた。

だが、もっと調べてみると、悪徳業者が壺を売りつけたりするあれは、ネットワークビジネスではなく、ネズミ講というものとわかった。

このように、知識がないと当時の僕のように、間違った認識を持って恥ずかしい思いをしやすい。

そして、多くの人がネットビジネスを詐欺とか怪しいと思ってしまうのは、知識を持っていないために、健全なネットビジネスをネズミ講に違いないと勘違いしているからだと思う。

なにせ、知識を手に入れる前の僕がそのように勘違いしていたんだから、僕以外にも間違った思い込みを持っている人がいても不思議ではない。

なので、僕はこのくらいの時期から知識の重要性が分かるようになった。

で、多くの情報発信者が言っていたのが初心者はまずは自己アフィリエイトをなさйтеということだった。

自己アフィリエイトというのは、自らがクレジットカードを発行したり、証券口座を開設したりすると、お金がもらえるというものである。

たぶん、ほとんどの人が「なんでクレジットカードを発行してもらっただけでお金がもらえるの？」と怪しく感じると思う。

だが、これは全く怪しいものではなく企業の広告宣伝の一部なのである。

例えば、企業からすればテレビなどで莫大なお金を使ってお客さんを集めるよりも、お金をプレゼントしてダイレクトに、お客リストを手に入れたほうが安上がりなのである。

だから、企業はお客にお金をプレゼントしてでもお客さんを集めたいと思っている。

つまり、自己アフィリエイトは一見怪しいが、実は、企業は集客できてうれしい、お客はクレジットカードを発行しただけでお金がもらえてうれしいという、まさにWINWINのビジネスなのである。

で、僕は試しに自己アフィリエイトをやってみた。

内心、本当にやってみて危険じゃないのかな・・・とドキドキしていた。

多くの情報発信者がハピタスというポイントサイトがおすすめだからやってみろといていた。

だから、ハピタスをやってみたら、2日くらいで、あっさり3万円くらい稼ぐことができてビックリした。

2日といっても作業をしたのは数時間程度である。

僕は改めてお金持ちになるには知っているか知らないかの違いは本当に大きいと思った。

3万円という金額は、時給800円のアルバイトを38時間やらないと手に入らない金額だ。

そんな金額を、クレカを発行したり、証券口座を開設するというものの数時間で稼げてしまう事実にはひたすら衝撃を受けた。

僕は、これらの実体験から、知っているか、知らないか、知識があるか、ないかで人生が大きく変わることを身をもって、体感した。

なので、知識、情報にはガンガンお金を投資してこれからも成長していける人生にしたいと思っている。

## 最終章 あとがき

僕は運がよくお金持ちになるためには、ビジネスか投資をやるべきだということを知ることができた。

さらに、机上の空論ではなく、しっかり着実に正しい方向に努力していくことで、ネットビジネスだろうが投資だろうが稼げるようになることを20代にして知れたのは本当にラッキーだと思う。

だから、僕自身がネットビジネスや投資のスキルを日々高めていくことで、得た学びや知恵をブログなどを通してあなたの人生に役立ててもらえれば、これほどうれしいことはない。

「人に役立ってもらってうれしいとか偽善じゃねえの？」  
と思う人もいるだろう。

だけど、あなた自身も人から「ありがとう！」と感謝されたり、困っている人を手助けして「君のおかげで助かったよ！」と言われて、不愉快に思うだろうか？

おそらく、うれしい気持ちやいい気分になるんじゃないだろうか？

僕がブログで情報を発信して、誰かの役に立ってうれしいと思うのもそれと同じような感覚である。

それから、僕は第5章「ビジネスと投資との出会いで人生が楽しくなる」で言ったが、知っているか知らないかで人生が変わるといふのは紛れもない事実である。

知っているか知らないかによって、お金持ちになるか、貧乏になるかが決定する。

もっと、抽象度を上げれば、知っているか知らないかで人生のクオリティそのものが大きく変わる。

例えば、世の中には、ビジネス、投資、人間関係、健康、恋愛、趣味、音楽、スポーツなど、数えきれないくらいの物事が存在している。

だが、すべての物事に共通するのは、知識があればどんな物事でも最強になれるということだ。

知識というのは言ってしまうと、知っているか知らないかである。

人間関係を円滑にしていくためには、例えば、人間心理学を勉強している人としていない人では、全然違った結果が生まれる。

今まで、コミュ障で人と上手く話せなかった人が、人間心理の知識を手に入れることで、コミュ障が改善されたという事例は世の中にごまんとある。

というか、これはまさに僕のことである。

このレポートをここまで読んでくれたあなたなら、僕がどれほど、孤独な人生を送ってきたのかがお分かりいただけたと思う。

中学、高校、大学と僕が、友達もできず、いつもぼっちだった人生から、いろいろな人に信頼されるような人生になれたのは、知識を仕入れてそれを自分の人生にしっかり生かしたからである。

僕の場合なら、コミュ障を治すために、人間心理学を徹底的に学んだ。

どうすれば、人はうれしい気持ちになるのか？ 悲しい気持ちになるのかという人間心理を学んだことで、人と接するとき、本当に楽にコミュニケーションが取れるようになった。

もしかしたら、あなた自身も、死にたくなるような悩みやコンプレックスなどを今この瞬間も持っているかもしれない。

だが、安心してほしい。

どんな悩み、苦悩だろうが、適切な知識を手に入れて適切な行動をとっていけば必ず悩みを解消することができる。

しかも、幸運なことに、今の時代はインターネットという超便利ツールがあるので、今すぐにでも、スマホの検索窓にキーワードを打ち込むだけで知識をかき集めることだってできる。

もちろん、ネット上にあるすべての情報が正しいとは限らない。

むしろ、偽情報とかゴミみたいな情報も大量に紛れ込んでいるのが悲しい現実だ。

だけど、インターネットという情報空間での知識収集を長く続けていると「あっ、これは良い情報だ！」「これは意味のない情報だ！」という取捨選択ができるようになる。

インターネットは嘘情報や適当な情報がたくさんあるのも事実だが、テレビや新聞などの情報よりかはよほど真実に近い。

なぜなら、テレビの場合はスポンサーの利潤が第一なので、時にはスポンサー企業の利益のために情報を捏造するということが日常茶飯事だからである。

それに比べ、ネットで情報発信している人は、中には例外もあるが、基本的に本当の事実や真実を伝えてくれる人がたくさんいるので、すごいためになる。

だから、どうせテレビで嘘情報を吹き込まれ、頭が混乱するくらいなら、しっかり、情報の取捨選択能力を身につけて自分が必要な情報だけを厳選してとりにいったほうが健全だと僕は思う。

なので、とにかく、正しい知識+正しい行動でどんな悩みだろうが、あっさり解消できることを覚えておいてほしい。

このことを知っているか知らないかだけでも、これからの人生の充実度は大きく変わるはずだ。

おっと、僕が今この文字を書いている時点で、文字数が13000文字を突破していた。

自分のストーリーを無我夢中で書いている間に、13000文字も書いていたなんて、正直びっくりした。

そして、こんな長い文章をここまで読んでくれて本当にうれしい。

僕はこのレポートで、過去のうれしかったことやつらかったことなどの喜怒哀楽ストーリーを包み隠さずさらけ出した。

正直、過去の、自分の苦悩やコンプレックスな出来事と向き合うのは、結構つらかったというのが本音だ。

だけど、このレポートを書くことで、自分自身を振り返る良い機会になった。

そして、このレポートを読んでもくれた人が、これからの人生でどんどん知識を手に入れて、楽しい人生を送れるようになることを願うばかりである。

ここまで、読んでくれて本当にありがとうございました。

タクヤ